

語アクセントから発話音調へ —音調句と二段上がりの一考察—

山下 英一郎

1. はじめに

特別な含意なしに発話する場合、連続して発話された音声は緩やかに下降していく。これは生理的な要因によるもので、自然下降と呼ばれている。発話中に音声上に切れ目が知覚されれば、切れ目の後には新しい音調句が作られたと聞き手は認識する。音声上の切れ目とは、音調が下降し続けるのではなく、上昇することによって、新しい音調句が作られるということである。では、下降しないままさらに上昇した時、どのような音声学的、音韻論的な意味があるのだろうか。

本研究では、先行する句の音調が平板式で終わり、次の句が上昇する現象を「二段上がり」と命名し、分析、考察を試みた。分析素材には、多くの日本語教育機関で使用されている日本語学習教材『みんなの日本語 I (第2版)』の第1課から第25課までの会話音声 CD を用いた。分析には、聴覚印象と音声分析ソフト「Praat」のピッチ曲線を手がかりにし、どのような場合に「二段上がり」が生じるかを分析した。尚、本研究は一般に日本語母語話者が「二段上がり」する場合を取り上げるものではなく、日本語教育で使用されている会話文という限定されたデータの中で、「二段上がり」の現象を分析、考察をするものとする。

2. 先行研究

郡(2017)の「意味の限定関係の連続とイントネーション」の研究においては相違点は書いてあるが、類似点がない。そこで言及している「意味の限定」とは、ある語についてそれが具体的に指し示す対象やそれがあらわす動作や状態のあり方を限定することであって、例えば「白い花」なら「白い」が「花」の意味を限定しているが「白い雪」なら雪は白いのが一般的であることから「白い」は「雪」の意味を弱めない。つまり、直前の文節によって

意味が「限定される語を含む文節のアクセントは弱めて言うのであって、直前の文節から意味が「限定されない語を含む文節のアクセントは弱めなくてよいとしている。

また窪園（1997）の研究では、「左側要素が平板式の語句であれば2要素が一つのイントネーション句にまとまるのに対し、左側要素が起伏式である場合には連続する二要素が融合せず、名詞句や動詞句といった統語範疇に関係なくダウンステップ（ないしはカタセシス *catathesis*）と呼ばれる音調下降現象が起こる。」といった音調下降現象には言及している。両氏とも2つの語句が連続した場合の音調現象に言及しているが、本研究にいう「二段上がり」に類似する研究は、管見の限り見当たらない。

3. 「二段上がり」の定義

一続きに発音されるまとまりを音調句（イントネーションの一種）とされているが、ここではこの音調句を「意味のまとまりの音声的な表れとしての音のまとまり」と定義する。具体的に音調句について説明を加えると、音調句とは、「伝えたい意味に応じて、話し手が自由にその長さを指定できる伸縮自在の単位」のことである。（2011：上野）

その上で、音調句において次の音調句が前の句末より低く始めれば、普通の音調句とし、対して「次の音調句が前の句末と同じ高さ」で始まり「句頭の上昇」が加わったときの音調の変化において「二段上がり」として着目をした。

本研究では、上述した「意味の限定関係」や「音調下降現象」を見るのではなく、単純に音調が「二段上がり」をしている点に着目をした。これについては以下に、『みんなの日本語 I（第2版）』からの発話①、②、③を引いて、分析してみる。尚、この分析結果にある「文節ごとに想定される音調」は、語アクセントの規則から導き出したものであり、「実際の会話音声 CD の音調」は、聴覚印象と Praat のピッチ曲線を参考にし、音調記号を付けたものである。図は、Praat によるピッチ曲線である。音素表記と、かな表記は筆者による。会話音声 CD を分析するにあたり、音声分析ソフト「Praat」のピッチ値は、男性（M）：50-300Hz、女性（F）：75-600Hz に設定している。また、「／／」は音調句を表す。

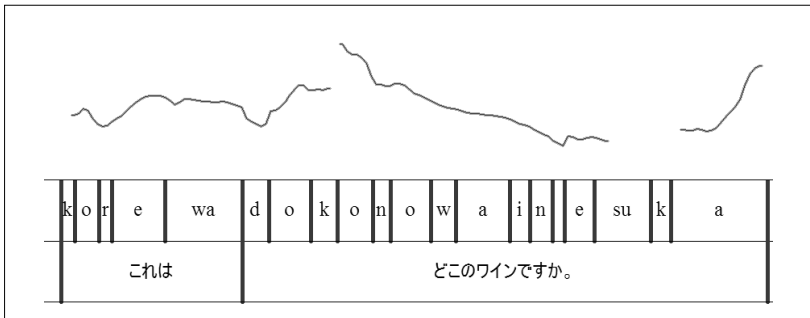
- ①第3課 (F) 「これはどこのワインですか」
- ②第10課 (F) 「あそこにしろいビールがありますね」
- ③第18課 (M) 「ほっかいどうにうまがたくさんいますよ」

○文節ごとに想定される音調

|こ「れは|「ど」この|「ワ」インです「か|

○実際の会話音声 CD の音調

／こ「れは／「ど」このワインです「か／



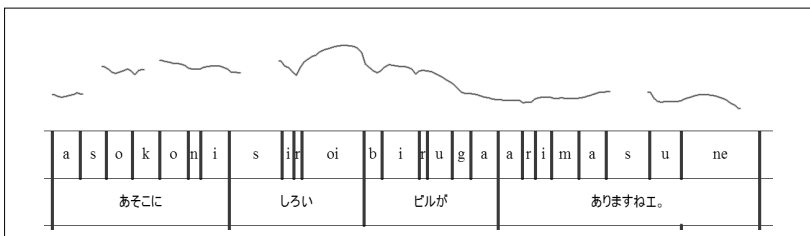
上記の例のように「これは」の句末のピッチ曲線を見てみると、ピッチ曲線は下がっており、聴覚印象でも「これは」から「どこのワインですか」にかけて音調が「二段上がり」をしているようである。このように下がらないまま次の上昇に続いている場合をここでは「二段上がり」と定義した。

○文節ごとに想定される音調

|あ「そこに|し「ろ」い|「ビ」ールが|あ「りま」すね|

○実際の会話音声 CD の音調

／あ「そこに／し「ろ」い／「ビ」ールがあります「ね」エ／



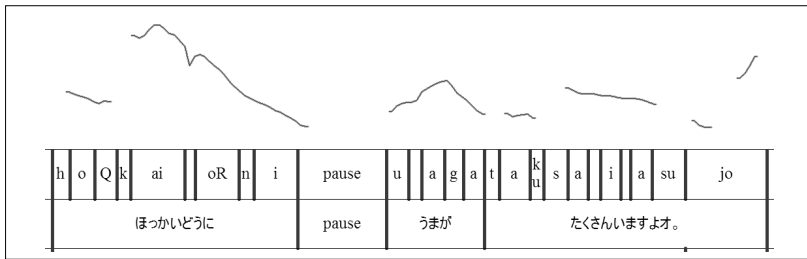
この例においても「あそこに」で上がり、「白い」であがる。「あそこ」から「白い」にかけて「二段上がり」をしていることがわかる。

○文節ごとに想定される音調

|ほ「っか」いどうに|う「ま」が|た「くさん」い「ま」すよ|

○実際の会話音声 CD の音調

／ほ「っか」いどうに／う「ま」が／た「くさん」い「ま」す「よ」オ／



上記の発話文に関しては山が三つで音調句が三つである。これはピッチが下がったところで、一つ音調句ができる。下降なしに上昇が続くことがないので、ここに「二段上がり」はない。

このように音調によって句が分けられる場合、

- A. ○「○○」○○／○「○」○○／○「○○○」のようなパターンだと句の切れ目が明確である。
- B. ○「○○○○○○○」○○／○「○○○」だと、A の前 2 句が一つになっている。(A の第 1 句のアクセント核がないからである)
- C. ○「○○○○」／○「○」○○／○「○○○」の場合、第 1 句と第 2 句との境界は、第 2 句の上昇で示される。しかし、第 1 句にアクセント核がない。

以上のような特徴が挙げられるが、ここでいう C の場合がいわゆる「二段上がり」であると考えられる。「二段上がり」のとき、別の音調句とすべきなのか、一つの音調句と考えるべきなのか、議論が必要であることは確かである。

る。

3-1. 「二段上がり」の検証と考察

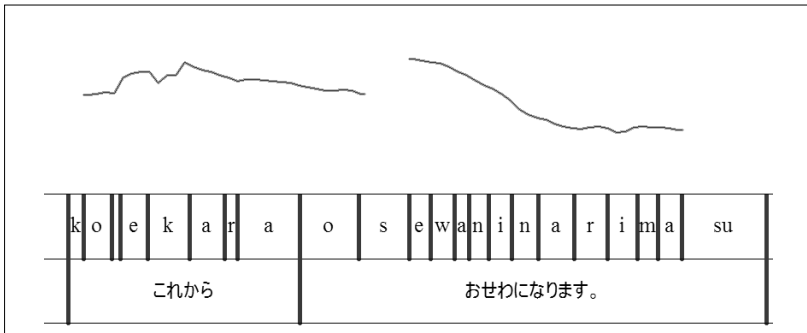
ここでは、第1課から第25課全ての会話表現の中に見られる「二段上がり」について検証をしていく。以下の音調記号をつけた会話文は、CDの音声を聞いて、筆者が記述した（※／／は音調句を表す）。下線で示している部分が「二段上がり」として考えられる部分である。

第1課

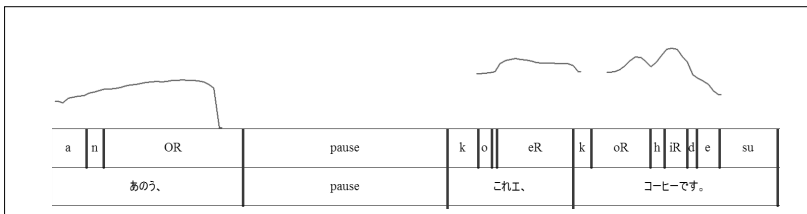
該当なし。

第2課

⑥／こ「れから／お「せ」わになります／（M）




⑨／あ「のう」／こ「れエ／コ「ー」ヒーです／（M）



第3課


⑨ / こ「れは」 / 「ど」このワインです「か」 / (F)



k	o	r	e	wa	d	o	k	o	n	o	w	a	i	n	d	e	su	k	a
これは					どこのワインですか。														

第4


⑦ / そ「ちらは」 / 「な」んじまでです「か」 / (M)



s	o	t	i	a	wa	n	a	n	z	i	m	a	d	e	d	e	su	k	a
そちらは						なんじまでですか。													

第5課

⑪ / あ「のう」 / こ「の」でんしゃはア / こ「うし」えんへ / い「きま」す「か」 / (M)



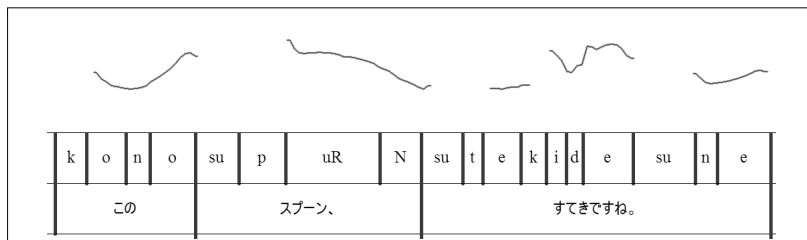
a	n	oR	pauze			k	o	m	o	e	n	s	ju	wa	k	oR	s	i	e	n	e	i	ki	a	su	k	a
あのう、			pause			このでんしゃは							こうしえんへ					いきますか。									

第6課

該当なし。

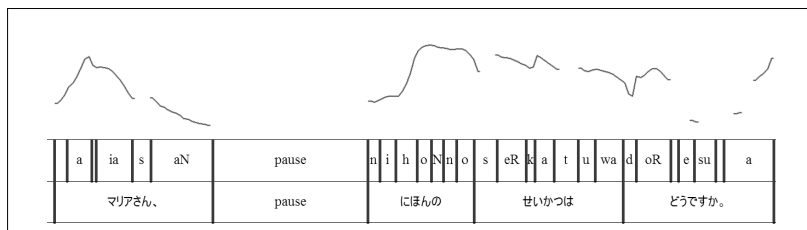
第7課

⑩ / この / スプーン / すてきで / すね / (F)

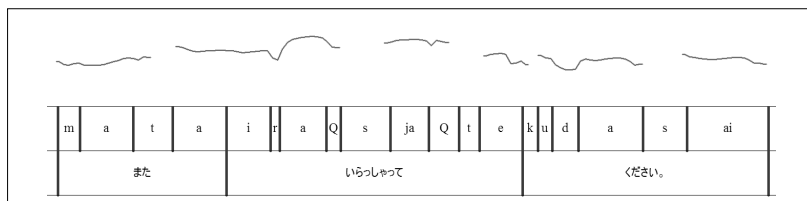


第8課

① / マリアさん / に ほんの せいかつは / どうです / か / (M)

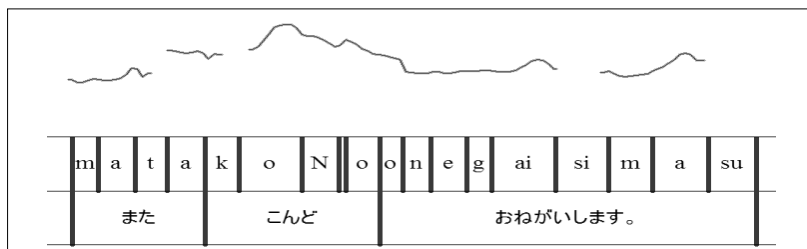


⑭ / ま た / い らっ しゃ って / く ださい / (F)




第9課

⑰ / ま た / こ んど / お ねが い し ま す / (F)




第 10 課

④ / あ「そこに／し「ろい／「ビルがありますね」エ / (F)



a	s	o	k	o	n	i	s	i	r	o	i	b	i	r	u	g	a	a	r	i	m	a	s	u	n	e
あそこに							しろい					ビルが				ありますね。										


⑪ / あ「ちらに／タ「イりょ「うりの／「コーナ－が／あ「りま「す / (M)



a	t	i	r	a	n	i	t	a	i	r	j	o	r	r	i	n	o	k	o	r	n	a	r	g	a	a	i	m	a	s	u
あちらに							タイりょ「うりの										コーナ－が				あります。										


第 11 課

⑩ / こ「うくうびんは／「い「くらす「か / (M)



k	o	r	k	u	r	b	i	n	w	a	i	k	u	a	d	e	s	u	k	a
こうくうびんは											いくらですか。									

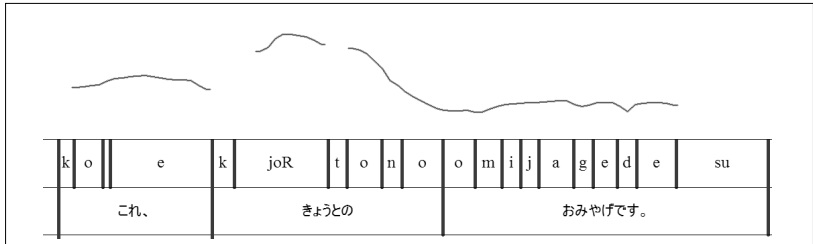
⑭ / ど「のく「らい／か「かりま「す「か / (M)



d	o	n	o	k	u	r	a	i	k	a	k	a	r	i	m	a	s	u	k	a
どのくらい									かかりますか。											

第 12 課

③ / こ「れエ / 「きよ^oう^oとの / お「みやげで^oす / (M)



第 13 課

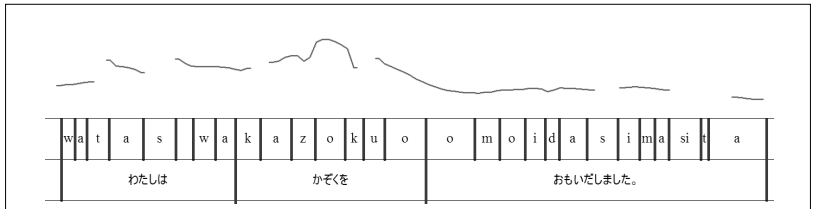
該当なし。

第 14 課

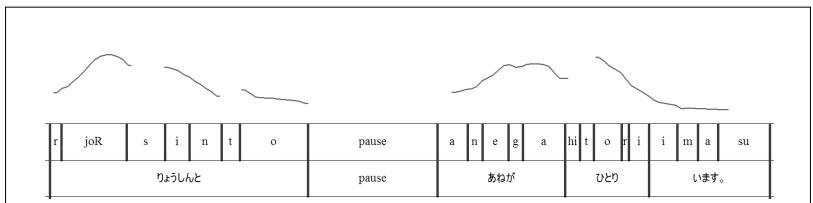
該当なし。

第 15 課


③ / わ「たしは / 「か^oぞく^oを / お「もいだし^oま^oした / (M)



⑥ / 「り^oょうしんと / あ「ねが / ひ「と^oり^oいます / (M)



⑨ / あ「ねは」 / 「ロンドンで」 / は「たらいていま」す / (M)



a	n	e	wa	r	o	N	o	N	e	h	a	t	a	r	a	i	t	e	i	m	a	su	
あねは				ロンドンで						はたらいています。													


第 16 課

該当なし。


第 17 課

該当なし。

第 18 課

⑥ / へ「え」 / そ「れは」 / お「もしろ」いです「ね」エ / (M)


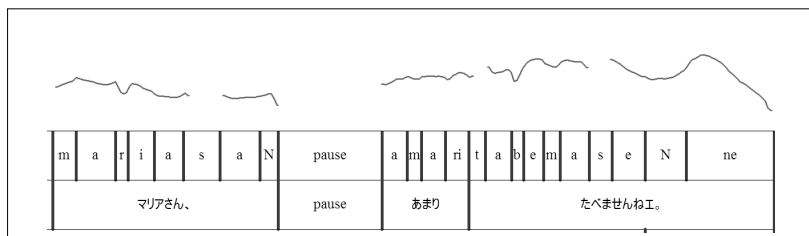
heR	pause	s	o	e	wa	o	o	s	i	oi	e	su	ne
へえ、	pause	それは				おもしろいですね。							

⑨ / に「ほん」では / な「かなか」 / う「ま」を / 「み」ることが / で「きませ」ん / (M)


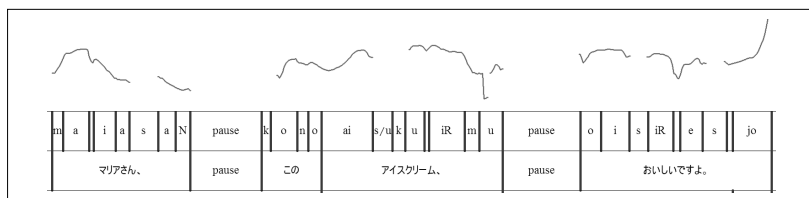
n	i	h	o	n	e	wa	n	a	k	a	n	a	k	a	u	m	a	o	m	i	r	u	k	o	t	o	g	a	d	e	k	i	i	a	s	e	n
にほんでは						なかなか							うまを			みることが					できません。																

第 19 課

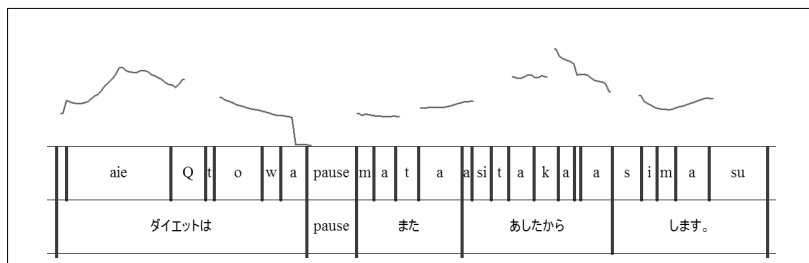
② / 「マ」リアさん / あ「まり」 / た「べませ」ん「ね」エ / (F)



⑪ / 「マ」リアさん / こ「の」 / ア「イスクリ」ーム / お「い」しいです「よ」 / (F)

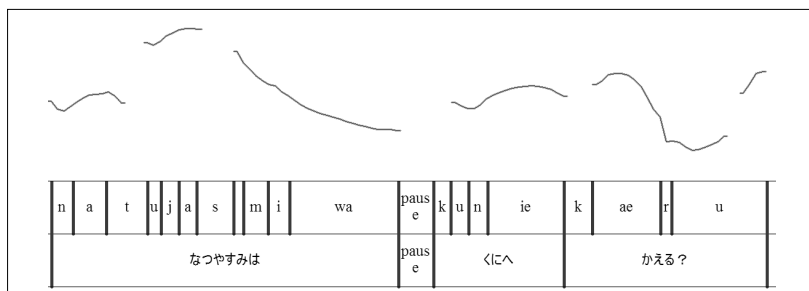


⑬ / 「ダ」イエットは / ま「た」 / あ「した」から / し「ま」す / (F)

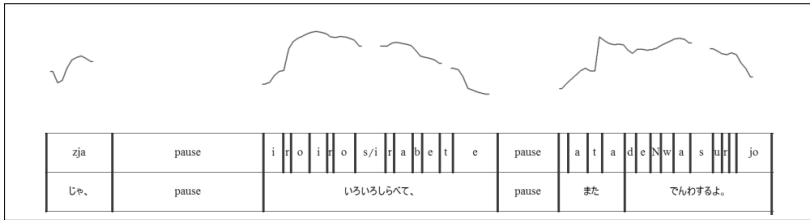


第 20 課

① / な「つや」すみは / く「に」へ / 「か」え「る」 / (M)

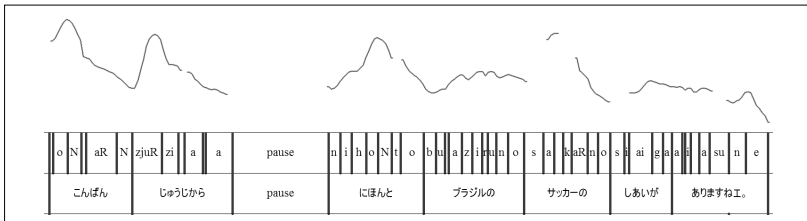


⑩ / 「じゃ」 / い「ろいろしら」べて / ま「た」 / で「んわする」よ / (M)

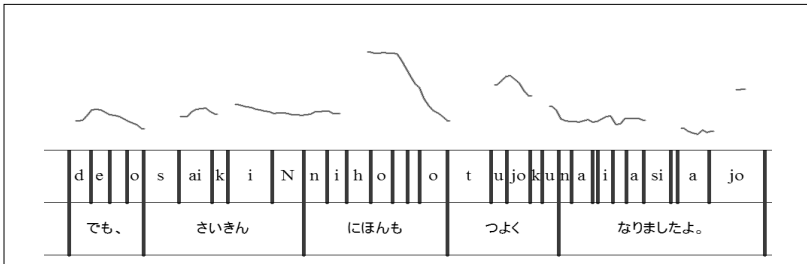


第 21 課

⑥ / 「こ」んばん / 「じゅ」うじから / に「ほ」んと / プ「ラジルの」 / 「サ」ッカ
ーの / し「あいが」 / あ「りま」す「ね」エ / (M)

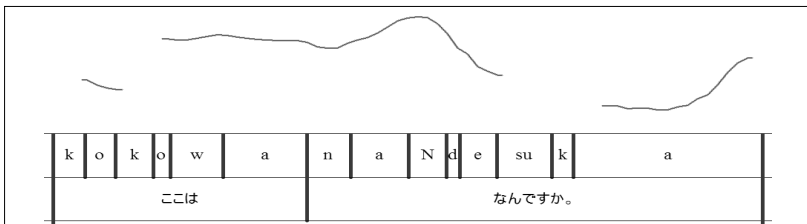


⑪ / 「で」も / さ「いきん」 / に「ほ」んも / 「つ」よく / な「りまし」た「よ」 / (M)



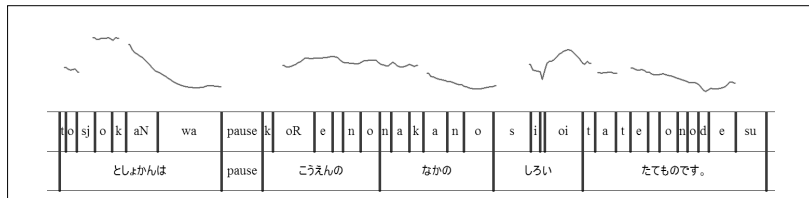
第 22 課

⑧ / こ「こ」は / 「な」んです「か」 / (M)



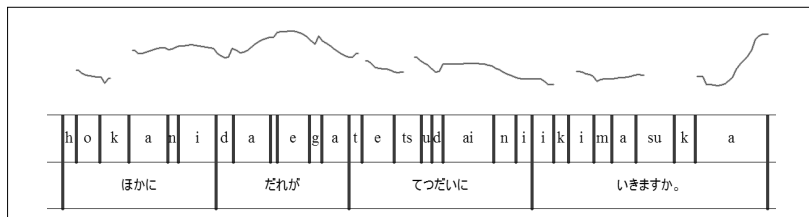
第 23 課

⑧ / と「しよ」かんは / こ「うえん」の / 「な」かの / し「ろ」い / た「て」もので
す / (F)



第 24 課

⑤ / ほ「かに」 / 「だ」れが / て「つだ」いに / い「きます」か / (F)



第 25 課

該当なし。

以上、本教材における全ての課における「二段上がり」と思われる部分を
示してきた。以下のように表にまとめてみる。表 1 は、第 1 課から第 25 課
全ての会話表現の中に見られる「二段上がり」を課ごとに記述し、左列に「通
し番号」を記した。

1	第 2 課	／ <u>こ「これから」お「せ」わになります</u> ／
2	第 2 課	あ「のう」／ <u>こ「れエ」コ「ーヒー」です</u> ／
3	第 3 課	／ <u>こ「れは」</u> ／「ど」このワインです「か」／

4	第4課	／そ「ちらは／「な」んじまでです「か」／
5	第5課	／あ「のう」／こ「の」でんしゃはア／こ「うし」えんへ／い「きま」す「か」／
6	第7課	／こ「の」／ス「プ」ーン／す「てきで」す「ね」／
7	第8課	／「マ」リアさん／に「ほんのせいかつは」／「ど」うです「か」／
8	第9課	／ま「た」／「こ」んど／お「ねが」いしま「す」／
9	第10課	／あ「そこ」に／し「ろ」い／「ビ」ルがあります「ね」エ／
10	第10課	／あ「ちら」に／タ「イ」りょ「う」りの／「コ」ーナーが／あ「り」ま「す」／
11	第11課	／こ「うくう」びんは／「い」くらです「か」／
12	第11課	／ど「の」くらい／か「かり」ま「す」「か」／
13	第12課	／こ「れ」エ／「きょ」うとの／お「みやげ」です
14	第15課	／わ「たし」は／「か」ぞくを／お「もい」だしま「した」／
15	第15課	「りょ」うしんと／あ「ねが」ひ「と」りいます／
16	第15課	／あ「ね」は／「ロ」ンドンで／は「た」らいていま「す」／
17	第18課	／へ「え」／そ「れ」は／お「もしろ」いです「ね」エ／

18	第 18 課	／に「ほ」んでは／ <u>な「かなか」う「ま」を</u> ／「み」ることが ／で「きませ」ん／
19	第 19 課	／「マ」リアさん／ <u>あ「まり」</u> ／た「べませ」ん「ね」エ／
20	第 19 課	／「マ」リアさん／ <u>こ「の」</u> ／ア「イスクリ」ーム／お「いし」 いです「よ」／
21	第 19 課	／「ダ」イエットは／ <u>ま「た」</u> ／あ「した」から／し「ま」す／
22	第 20 課	／な「つや」すみは／ <u>く「に」へ</u> ／「か」え「る」／
23	第 20 課	／「じゃ」／い「ろいろ」しら「べて」／ <u>ま「た」</u> ／で「んわする」 よ／
24	第 21 課	／「こ」んばん／「じゅ」うじから／に「ほ」と ／ブ「ラジルの」／「サ」ッカーの／し「あいが」／あ「りま」 す「ね」エ／
25	第 21 課	／「で」も／さ「いきん」／に「ほ」んも／「つ」よく／な「り」 ました「よ」／
26	第 22 課	／こ「こは」／ <u>「な」</u> んです「か」／
27	第 23 課	／と「しょ」かんは／ <u>こ「うえん」</u> の／「な」かの／し「ろ」い ／た「て」ものです／
28	第 24 課	／ <u>ほ「かに」</u> ／「だ」れが／て「つだ」いに／い「きます」か／

表 1 「二段上がりをしていると思われる発話文」

上記の表 1 のように「二段上がり」と推定できる部分に着目すると、「二段上がり」を規定する要因には、いくつかの規則的側面が見受けられる。この規則的な音調の要因を郡 (1997) の「フォーカスと文型」では疑問詞疑問文、真偽疑問文、対比のハ、否定文などの文型などによってフォーカスが置かれ

ると言及している。この論考に従って、表1を再分類すると、以下の表2と表3となる。また、表4から表8は、無助詞や連体詞などといった発話文の特徴によって筆者が分類してみた。

表2は、疑問詞疑問文で未知の情報を聞くのが目的であるので、表2のように、何が未知で知りたいことなのか示す疑問詞自身にフォーカスが当てられ、「二段上がり」といった現象が生じていると言える。表3は真偽疑問文の発話文である。郡(1997:182)では、「一般疑問文では、述語にフォーカスがあることが多い。」とあるが、通し番号22では、述語にフォーカスが置かれているが、通し番号5では、述語にはフォーカスが置かれていない。その理由は、「甲子園」に行くかどうか知りたい情報であるため、述語の「行きますか」にフォーカスを置いて、発話をするとう自然な発話となるからである。真偽疑問文では、文脈によって、フォーカスの位置が移動可能だと思われる。表4は、無助詞に続く発話文であるが、これらの発話文では2文節で1音調句になる傾向があり、独自の音調句を形成すると考えられ、今後検証が必要である。表5は、連体詞に続く発話文で、特定の物(スプーンとアイスクリーム)を指し示すため、これらの語にフォーカスが置かれると考えられる。表6は、指示詞に続く発話文であるが、指し示す対象が特定されているため、指し示される語にフォーカスが置かれ、「二段上がり」の現象が生じていると考えられる。表7の副詞に続く発話文では、副詞に続く語を強める働きがあると考えられ、副詞に続く語にフォーカスが置かれやすいと推測される。表8は、平叙文であり上述してきた発話文とは性質が異なる発話文であるが、「意味的な要素」や話者の気持ち、何らかの感情によるムード的な要素が加わることで、音調句が「二段上がり」するのではないかと考えられる。

3	第3課	／ <u>こ</u> 「 <u>れ</u> は／「 <u>ど</u> 」このワインです「 <u>か</u> 」／
4	第4課	／ <u>そ</u> 「 <u>ち</u> らは／「 <u>な</u> 」んじまでです「 <u>か</u> 」／
7	第8課	／「 <u>マ</u> 」リアさん／ <u>に</u> 「 <u>ほ</u> んの <u>せい</u> か <u>つ</u> は／「 <u>ど</u> 」うです「 <u>か</u> 」／

11	第 11 課	／ <u>こ</u> 「うくうびんは／「い」くらです「か」／
12	第 11 課	／ど「の」くらい／か「かりま」す「か」／
26	第 22 課	／ <u>こ</u> 「こは／「な」んです「か」／
28	第 24 課	／ <u>ほ</u> 「かに／「だ」れが／て「つだ」いに／い「きます」か」／

表 2 「疑問詞疑問文の発話文」

5	第 5 課	／あ「のう」／ <u>こ</u> 「のでんしゃはア／ <u>こ</u> 「うし」えんへ／い「きま」す「か」／
22	第 20 課	／な「つや」すみは／ <u>く</u> 「にへ／「か」え「る」／

表 3 「真偽疑問文の発話文」

2	第 2 課	あ「のう」／ <u>こ</u> 「れエ／コ「ーヒー」です／
13	第 12 課	／ <u>こ</u> 「れエ／「きよ」うとの／お「みやげ」です

表 4 「無助詞に続く発話文」

6	第 7 課	／ <u>こ</u> 「の」／ス「プーン」／す「てき」です「ね」／
20	第 19 課	／「マ」リアさん／ <u>こ</u> 「の」／ア「イスクリューム」／お「いし」いです「よ」／

表 5 「連体詞に続く発話文」

9	第10課	／あ「そこに／し「ろ」い／「ビ」ルがあります「ね」エ／
10	第10課	／あ「ちらに／タ「イりょ」うりの／「コ」ーナーが／あ「り ま」す／
17	第18課	／へ「え」／そ「れは／お「もしろ」いです「ね」エ／

表6 「指示詞に続く発話文」

1	第2課	／こ「れから／お「せ」わになります／
8	第9課	／ま「た／「こ」んど／お「ねがい」します／
18	第18課	／に「ほ」んでは／な「かなか／う「ま」を／「み」ることが ／で「きませ」ん／
19	第19課	／「マ」リアさん／あ「まり／た「べませ」ん「ね」エ／
21	第19課	／「ダ」イエットは／ま「た／あ「した」から／し「ま」す／
23	第20課	／「じゃ」／い「ろいろ」しらべて／ま「た／で「んわする」 よ／
25	第21課	／「で」も／さ「いきん／に「ほ」んも／「つ」よく／な「り まし」た「よ／

表7 「副詞に続く発話文」

14	第15課	／わ「たしは／「か」ぞくを／お「もい」だしました／
----	------	---------------------------

15	第 15 課	「りょうしんと／ <u>あねが</u> ／ひと／ <u>りいます</u> ／
16	第 15 課	／ <u>あねは</u> ／「ロンドンで／は「 <u>た</u> らいています／
24	第 21 課	／「 <u>こんばん</u> ／「じゅうじから／に「 <u>ほん</u> と ／ <u>ブラジルの</u> ／「 <u>サッカーの</u> ／し「 <u>あい</u> が／あ「 <u>り</u> ま す「 <u>ね</u> エ／
27	第 23 課	／と「 <u>しょ</u> かんは／ <u>こ</u> うえんの／「 <u>な</u> かの／し「 <u>ろ</u> い ／た「 <u>て</u> ものです／

表 8 「その他（平叙文）の発話文」

4. 考察及び今後の課題と展望

本研究では、発話音調における「二段上がり」の特性について着目してきた。もっとも、この「二段上がり」に関しての比較研究及び研究自体がほとんどないということから、分析、考察をしきれていない。

今後は、文節から発話への音調の実現（二段上がりを含む）がどのようになされるのか、発話者のバックグラウンドを分類しながらも、できうる限り目に見える形で明らかにしていきたい。

参考文献

- ・上野善道（2011）「音調句」、『音声学事典』、pp.322-323
- ・郡史郎（1997）「日本語のイントネーション—型と機能—」、『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』所収、三省堂、pp.180-181
- ・郡史郎（2017）「日本語イントネーションについてのいくつかの聴取実験」大阪大学大学院言語文化研究科、言語文化研究、巻 43、pp.249-272
- ・窪蘭晴夫（1997）「アクセント・イントネーション構造と文法」、『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』所収、三省堂、p.215

分析素材

- ・田中よね他著（2013）「みんなの日本語 I（第 2 版）」スリーエーネットワーク